サルー Salud!★11号
2014年11月10日

●キューバ友好円卓会議　通信
e-mail：cuba.entaku.0803@gmail.com
FAX　03－3415－9292　　http://cubaentaku.web.fc2.com/
〒157-0073　東京都世田谷区砧8-15-14-101

2014 キューバ友好フォーラム

ラテンアメリカの今、そしてキューバ

12月6日（土）
13:00～16:30

会場：**日本記者クラブ大会議室**　（TEL 03－3503－2721）
〒100-0011　東京都千代田区内幸町２－２－１　日本プレスセンタービル９階
最寄り駅は東京メトロ千代田線・日比谷線霞ヶ関駅、東京メトロ丸ノ内線霞ヶ関駅、都営三田線内幸町駅、ＪＲ新橋駅日比谷口

ラテンアメリカが、世界中から熱い視線を浴びています。このところ、ここを舞台に大国による活発な「外交攻勢」が繰り広げられているからです。2012年には、ローマ法王ベネディクト16世がキューバを訪問して世界的な関心を呼び起こしましたが、今年７月には、プーチン・ロシア大統領がアルゼンチン、ブラジル、ニカラグア、キューバの４カ国を、習近平・中国国家主席がブラジル、アルゼンチン、ベネズエラ、キューバ４カ国を、日本の安倍首相がメキシコ、コロンビア、チリ、ブラジル、トリニダード・トバコの５カ国を相次いで訪問し、世界的な注目を集めました。

ラテンアメリカで今、何が起きているのか。その中で、キューバはどんな役割を果たしているのか。そこで、ラテンアメリカ情勢に詳しい神奈川大学教授の小倉英敬さんと、この10月初めに日本・キューバ友好議員連盟が主催した「日本・キューバ友好400周年交流事業　キューバ・ハバナ６日間の旅」に同行・取材した河北新報社記者の片桐大介さんをお招きしてお話を伺います。ラテンアメリカに関しては日ごろ、情報が極めて少ない日本です。その現状を知るまたとない機会です。ご参加をお待ちしています。

■プログラム■

来賓挨拶（予定）　**マルコス・ロドリゲスさん**　駐日キューバ大使

講演１　**キューバを取り巻くラテンアメリカ及び国際情勢**
小倉英敬さん　神奈川大学外国語学部スペイン語学科教授
1951年生まれ。青山学院大学大学院博士課程中退。1986年外務省入省、中南米局、在キューバ大使館、在ペルー大使館、在メキシコ大使館在勤を経て、１９９８年末退官。現在、神奈川大学教授。
著書に『封殺された対話　ペルー大使公邸占拠 事件再考』（平凡社）、『アンデスからの暁光　マリアテギ論集』（現代企画室）、『メキシコ時代のトロツキー』（新泉社）、『ラテンアメリカ１９６８年論』（新泉社予定）。最近の雑誌原稿では「世界構造変革に向けたラテンアメリカの挑戦」『神奈川大学評論』（第77号、2014年３月）

講演２　**初めて見たハバナの印象**
片桐大介さん　河北新報社記者
1976年生まれ。東京都出身。早稲田大法学部卒。1999年４月河北新報社入社、整理部、報道部、秋田総局、泉支局を経て、現在報道部。

立食パーティー♪
参加費　講演会のみの方は1000円／パーティーも参加する方は3000円
当日、会場でお支払いいただきます。

マルコス・ロドリゲスさん

小倉英敬さん

片桐大介さん

♪どなたでも参加できます♪　お友達を誘ってご参加ください
★申込締切　11月30日
FAXかｅ-mailで下記へお申込みください。
★参加申込み　キューバ友好円卓会議
〒157-0073　東京都世田谷区砧8-15-14-101
FAX　03－3415－9292
e-mail：cuba.entaku.0803@gmail.com

キューバ友好円卓会議主催
キューバツアーのご案内を
12ページに掲載しました。

報告

日本・キューバ友好議員連盟 主催／日本・キューバ友好400周年交流事業

全日空チャーター便でいくキューバ・ハバナ６日間の旅　10月１日～６日

変わりゆくキューバ、変わらぬキューバ

阿部知子（衆議院議員・小児科医）

１．フィデルからラウルへ

私がはじめてキューバを訪れたのは2007年1月、今から七年余り前となる。きっかけは何であったか、今では定かではないが、元々学生運動世代としては「憧れのチェ・ゲバラ」の国であり、ゲバラ亡き後も1959年キューバ革命の同志であったカストロ議長に率いられてキューバ危機やソヴィエト崩壊という歴史的な変動を乗り越え、近年はラテンアメリカ諸国やアフリカにまでも医療支援を繰り広げる「ゆるがぬ信念ある国」として興味を持っていた。

永続革命を求めてキューバを後にしたエルネスト・ゲバラがボリビアの山中で殺害されたのが1967年。彼はアルゼンチン生まれの医師であり、その彼の遺志を誰よりも知るフィデル・カストロがキューバの建国の途上で貧しい人々の為の医療の普及を目標とし、更にそれを中南米に広げたことは必然であったとも思う。

私の一度目の旅では、そんなカストロとゲバラの関係を大切に思う何人かの友人と共にキューバの保健省をはじめ各地のセンター病院、ポリクリニコ、ファミリードクターの診療現場等を見学した。

併せてソヴィエト崩壊後に食料自給を高める為に各地で取り組まれている農業生産の数々（ミミズ耕法、学校の庭での野菜作り、山間の農業専門学校）に加えて、山間部の小学校での再生可能エネルギーへの取り組みや子ども達のパソコンの使用の様子も見せてもらった。

フィデル･カストロは体調不良と高齢を理由に2008年には弟であるラウル・カストロに国家評議会議長の職を譲り、その健康が案じられていたが、最近では再び鋭い論評を再開している様子で、是非とも現代世界が直面するグローバル化経済の進行による格差拡大と世界各地で多発する紛争を押し止めるべく、世界中にキューバの実践の意味を再認識させて欲しいと思う。非核、平和、わけても人々の平和的生存は今や世界が望む希望の姿であるから。

２．日本・キューバ交流400年

そもそも今回のキューバ訪問は、超党派の国会議員からなるキューバ議連の会長古屋圭司議員の提案で、今から400年前に遡る支倉常長一行のキューバ寄港に始まる日本とキューバの交流を記念して、再び日本からの訪問団を送ろうということになった。

実は会長の古屋圭司議員は、フィデル・カストロ前議長との親交が深く、加えて日本の国会議員には保革を越えて政治家フィデル・カストロへの評価が高く、またエルネスト・ゲバラの人気も高いという特別な背景もあったので、とにかく超党派で訪ねるという機運は一挙に高まった。私自身はそれに加えて、これまでもキューバの医療実践に共感し、またゲバラの遺児である小児科医のアレイダ・ゲバラさんとはしばしば意見交換してきたので、今回も医療というルートで個別にあちこちの訪問を企画していた。

予定されたこの訪問団の期日が秋の臨時国会と一部重なってしまった為、結果的には団長として古屋氏と副会長の私のみが参加することになったが、日本にとってキューバは遠くて近い人気の国であることは間違いない。そのことは、今回の訪問は全日空の直行チャーター便で一般参加者も募集したが、仙台育英高校（数年前に支倉常長の銅像をキューバに建立）の生徒さん達18人も含めて応募は200人を超えてすぐ満席となったことからもうかがえる。

キューバと米国は1961年に外交断絶をしており、米国による経済制裁が続けられ、今もアメリカ経由でキューバに渡ることが出来ないため、通常カナダのバンクーバーやトロントや仏のパリを経由して行く。また、今回のように直行便で行っても給油の為の乗り換えも含めて約16時間と長旅ではあった。

そんな中、大勢の日本人がキューバを訪れ直接体感してもらうことは日本とは遠い「不思議の国キューバ」にふれる良いチャンスになるし、また何よりも観光とは「Passport to Peace」（平和へのパスポート）であるという言葉が実感されると思う。

３．代表団としての仕事

代表団の構成は、古屋圭司会長を中心とする議員団（政治、政府関係）と経済界から近藤会長以下日キューバ経済懇話会の一行、そして宮城県からは副知事や支倉常長の出身地の町会議長・議員の皆さん、仙台育英高校関係者、それに交流セレモニーに出演する音楽関係者など多彩であった。

まず政治・経済関係ではラウル・カストロ議長に次ぐ

ディアスカネル国家評議会第一副議長、カブリサス閣僚評議会副議長、更にロドリゲス外務大臣、そしてマルミエルカ外国貿易・外国投資大臣と会見した。また議会側からはマリ人民権力全国議会副議長招待の昼食会での意見交換も行われた。

キューバ革命以降、キューバは今日では世界でたった二つとなった朝鮮民主主義人民共和国と並ぶ社会主義国の一つである。もちろんアメリカとの緊張関係は形を変えて今も続くが、近年オバマ政権の誕生によって関係改善され、キューバ系米国人のキューバ訪問・送金制限は撤廃された。加えて 2011 年の共産党大会ではラウル議長が正式に第一書記に就任するとともに新たな「経済社会政策方針」が提案されて経済改革が進んでいる。また 2013 年からは移民法も改正されてキューバ人の海外渡航が自由になった一方で、国内の格差が拡大してきているという。

今回の日本からの経済関係の訪問団もそうしたキューバ経済の市場開放に期待し、今後はマリエル港など一部の経済特区で更に活発に取引が行われることを見込んでいるのだろう。2013 年 10 月段階で進出の日本企業数はわずか 14 社とのことで、医療やバイオ産業も含めて今後が期待されているとみてよい。

そもそもキューバは外交面においても、アフリカを中心とする非同盟諸国、ラテンアメリカ、カリブへの医療、識字教育サービスを積極的に行っており、その影響力も強い。日本にとってもキューバとの交流がさらに背後に広がるこうした国々との交流へと発展していくことになることを期待している。

４．キューバの医療

日本と比べ経済規模は１／80 以下であっても医療における人的国際貢献は数万人と桁違いに多いキューバでは、今回の西アフリカのエボラ出血熱に対しても既に延べ 350 人の医療者を現地派遣しているという。その医療者の多くがかつてリベリアやギニア、シエラレオネなどで医療実践があり、今回の事態に居ても立っても居られず、自ら派遣を名乗り出る医師が後を絶たないという。現地の人々の生存と生活を守るというキューバの医療者の志が背景にあることと思う。エボラ出血熱への対策は全世界が固唾を飲んで見守っており、各国からの支援金や著名人からの寄付もＷＨＯ等の国際機関に寄せられている。一方、自らも感染の危険を伴う現地への人材派遣は極めてハードルが高い。にもかかわらず現地の状況を何とかしたいと行動するキューバの医療者の姿勢は他に較べるべくもないし、実は国内医療における治療姿勢にも共通している。

今回の視察で、私が一行とは別途に訪れたのは伝統医学を専門にするポリクリニコで、脳梗塞の合併症や神経難病の方々にアロマ、鍼灸、リハビリ等を組み合わせて何とか症状軽快させたいという熱意に支えられており、患者さんへのまなざしも温かだった。

また今一つの視察先は、日本でも患者さんの多い網膜色素変性症の早期発見、早期治療、そして反復継続治療を掲げた国際センターであるカミロ・シエンフエゴス病院であった。日本では網膜色素変性という診断は即「失明」の宣告であり、それまでをいかに延ばし視力を保持するかの発想はない。フィデル・カストロの肝いりで 1990 年代に始まったこの病院に働く医師達は今も熱心に治療努力を続けている。

治療の原点、医の原点を忘れない医療者が次々と生まれ続ける国キューバの底力を見たように思う。

最後に

今回の日本からの訪問団での今一つの仕事は、我が国からの技術協力として米をはじめとする品種改良に取り組むキューバの穀物研究所へのＪＩＣＡ（国際協力事業団）の器材供与であった。

今回の訪問では前回の訪問時に比べて食料自給の熱気が少しさめているのかなと感じながら、この供与式に参加したが、農業についてはまた次回是非より深く見てみたいと思っている。生命の営みの基本は農業と食料自給にあると思うので。

私の後援会からもたくさんの皆さんが参加してくださったこの旅、皆さん十分満足してくださって、まるで「天国への旅」みたいだったと。お疲れさま、そしてまたどこかに行きたいですね。

2014 年 10 月 20 日（メールマガジンより転載）

← カブリサス閣僚評議会副議長（右）と握手する古屋圭司衆院議員＝10 月３日、ハバナ市

支倉常長像前で和太鼓を演奏する仙台育英高の生徒たち＝10 月２日、ハバナ市

← 買い物客らでにぎわう世界遺産ハバナ旧市街＝10 月４日、ハバナ市

写真提供：河北新報社・片桐大介記者

WHOが「医療従事者の最大の提供国」と評価したキューバ

富山栄子（国際交流・平和フォーラム代表）

アフリカ32カ国に4048人のキューバ人医師・看護師

西アフリカのエボラ出血熱が世界的脅威になっています。医療従事者も犠牲になるなど困難さが緊急対応を難しくしています。世界保健機関（ＷＨＯ）によれば、医療従事者約280人、感染した人の半数以上が死亡しています。10月、キューバは461人の医師団をシエラレオネ、ギニア、リベリアに派遣しました。志願者１万５千人から選抜されました。

29日・30日にはハバナで「エボラについての国際会議」が開かれ（ＡＬＢＡ＊1主催）、米国を含む32カ国から250人以上の専門家が参加しました。この問題は西アフリカだけで解決できるものではなく、国連とＷＨＯとに協力した国際的支援が必要だという認識から開催されました。ＷＨＯはキューバを「医療従事者の最大の供給国」と評価しています。

もちろん、日本の安倍晋三首相あてにも、リベリアのサーリーフ大統領から緊急医療隊の派遣を要請する書簡が９月10日付けで送付されています。

アフリカとキューバの関係は緊密です。過去50年間、アフリカ大陸39カ国で７万６千人以上の医療従事者が診療、完全無料で45カ国から医学生を招聘し、3392人の医師を養成しました。70年代からはエチオピア、ウガンダ、ガーナ、ガンビア、赤道ギニア、ギニア・ビサウなどの国々に医学校を建設しています。

今、アフリカ32カ国で4048人のキューバ人医師・看護師が働いています。＊2またアンゴラでは70年代、80年代を通じて南アフリカのアパルトヘイトと右派ゲリラと闘うため30万人のキューバ人が戦闘に参加しました。犠牲になった人もいます。その他、教育・スポーツ・文化の分野で協力した人を含めると40万人以上になります。

ちなみにキューバの人口は1100万人です。なぜ小国がこれほどの貢献ができるのでしょうか？　もちろん、キューバ人にはアフリカ人の血が流れています。植民地支配・奴隷制を通じて農場で、工場で、金持ちの家で暴力的な搾取を受けながら生き延びてきています。これは全ラテンアメリカ・カリブ海諸国も同じです。

キューバ人はよく「アフリカに大きな借りがある」と言います。社会発展がアフリカの人的・物的資源の強奪なしにはありえなかったからです。

全世界の発展した資本主義国にも同じことが言えます。植民地支配・新植民地支配なくして資本主義の発展はありません。20世紀後半、アルジェリアの独立戦争から南アのアパルトヘイト体制敗退まで西側諸国はどれだけ軍事介入し、軍産複合体を繁栄させてきたでしょうか？　人的損害を強制したでしょうか？　エネルギー・鉱産資源、希少金属、農産物など先端産業を維持し、現代人の生活を潤すため多国籍企業はどれほどの利益をアフリカから享受してきたでしょうか？　私たち市民は携帯電話（タンタル）やチョコレート（カカオ豆）やコーヒーのない暮らしを想像できますか？

西アフリカへの医師派遣に1分の躊躇もしなかった

エボラ熱に戻ります。この病気は40年も前の70年代に発見されています。しかし、豊かな国の医学界や製薬会社は治療法にもワクチン開発にも積極的ではありませんでした。利潤が小さいため怠慢でした。コストやパテントに縛られてもいます。

一方、キューバでは「ペドロ・コウリ熱帯病研究所」が中心になって今回、医療従事者に対エボラの集中訓練を行いました。さらにラテンアメリカ・カリブ海諸国に対して予防措置を高めるための人員派遣と教育を行っています。10月20日にはＡＬＢＡ諸国の首脳が緊急会合し、地域として団結してエボラ熱に対処し、予防していこうと決議を採択したのです。

すべての公職から今は退いているフィデル・カストロ同志は「西アフリカに医師を派遣することに（保健省は）１分の躊躇もなかった」と10月17日に書いています。「意識を持つ人ならばだれもが、危険な任務を実行するため高度に訓練された人員にリスクが伴うような政治的決定がなされた場合、それは高いレベルの責任を意味するということを知っている」と説明しています。

キューバは革命勝利の翌年、チリの地震災害に支援を行いました。アルジェリア独立戦争時の63年には負傷者を救うために医師団を送りました。

革命はいつも連帯の思想を実践にかえてきました。それを支えたのは国内の医療制度、平等な教育制度、雇用・労働者保護政策、富の偏りのない社会の建設です。基礎は社会主義制度です。

これからもキューバに注目です。

＊1　０４年12月、チャベス・ベネズエラ大統領とフィデル・カストロ議長との間で「アメリカ諸国民のためのボリーバル計画」が合意され、医師派遣と石油供給プログラムを開始した。のちにボリビア・エクアドル・ニカラグアなどが加わり、現在は９カ国が加盟している。「計画」から「同盟」に改称、経済・文化協力を実施している。10周年記念会合が来る12月14日、ハバナで開かれる。

＊2　キューバ人医療従事者は現在、世界66カ国で50731人いる。

ニューヨークタイムズ（2014・10・21）より　（訳・安田 清）

エボラに対するキューバの感動的な役割

この小さな国と医師たちの努力は、米国を不名誉な状態においている

キューバは貧しい国であり、世界から取り残されている国で、エボラの広がりが世界に脅威を与えている西アフリカの国々からは4500マイルも離れている。だが、流行の最前線へ数百名の専門家を派遣すると宣言し、ウイルスを抑制しようと支援を求めている国々に、キューバは最も力強い役割を果たそうとしている。

少なくとも世界的規模での支援という意味では、キューバの貢献は決して大きなものではない。それにもかかわらず、このことは称えられ、見習うべきものである。エボラに対し世界中がパニックを来たし、国家からの支援の反応は少なく力を失っている。

米国や他の豊かな国は、お金をだすことで満足しており、最も必要なこと、現場に医療の専門家をという支援を申し入れているのは国家ではキューバだけで、あとは２、３の非政府組織である。

患者を早期に発見し、隔離施設に収容するために必要な西アフリカの医師は少なく絶望的である。400名以上の医療従事者が感染し、4500人の患者が死亡した。

ウイルス感染は米国やヨーロッパでも起こり、大きな脅威をもたらす流行が、もうじき来るのではないかという恐怖感が起きている。

エボラにたいして戦うべきワシントンが、勇敢にも貢献しているハバナを外交上遠ざけているのは､恥である。米国とキューバの政府が広い分野で高度の協力ができなければ、エボラの対応で分裂するならば、生か死を分ける結果をもたらす。

キューバとの外交上の関係を素早く改善することの利益は、不利益よりはるかに大きいことを、オバマ政権は緊急に判断し思い起こすべきである。

キューバ医療団は感染の最も流行している人たちのなかで活動し、感染者を減少させられるかもしれない。ＷＨＯがキューバの医師を指導するが、どんな治療が有効か不明確で、キューバ人が感染し撤退しなければならない可能性もあり得る。感染患者を搬送するためには、経験をつんだ隊と特別に用意された航空機が必要である。

ジョン・ケリーの秘書は“この業務につく医療者の勇気”を称賛し、キューバの行動を手短に報告した。西アフリカに駐留している約550隊の米軍は、良識と共感を示し、モンロビアに作ったペンタゴン治療センターへのキューバからのアクセスを了承し、また搬送を助けることを表明すべきだろう。

キューバの医療者の活動は全活動に利益をもたらす。このことを認めるべきだ。しかしオバマ政権の外交官は、どんな支援も自分たちのためにしていると、鈍感な発言をしている。

キューバの医療センターは、危険な活動でリスクがあることを承知している。2010年のハイチの地震で、キューバの医師はコレラ患者の治療の先頭に立った。数名が国に帰って発病し、全土にコレラが拡がった。キューバでのエボラの流行は遥かに危険で、西半球全体への急速な拡大の危険性を増す。

キューバは世界の災害地へ医師、看護師を派遣してきた長い歴史がある。2005年のハリケーン・カトリーナの災害時、キューバ政府は緊急に医療団を結成しニューオリンズへ医師を送ると申し入れた。米国はハバナからのこの申し入れを受けなかった。

しかし、ワシントンの役人は、キューバがシェラレオネ、リベリア、ギニアに医療チームを送った今回の行動には感嘆しているようだ。

強い伝染性ウイルスの患者を治療するために、ＷＨＯと協力し、キューバ政府は460名の医師・看護師を厳重な警戒を要する地に送った。つい最近第１グループ165名がシェラレオネに到着した。

ＷＨＯハバナ代表のホセ･ルイス･ヂ･ファビオ氏は、キューバの医療者は独自の防護体制を用意しており、これまでにもアフリカで活動したことがある、と述べた。“キューバは非常に有能な医療のプロ集団だ”とウルグアイ人のＭＲ．ヂ･ファビオ氏は言った。ファビオ氏は、世界の健康危機へのキューバの努力を、米国はキューバの港にかけている通商禁止令によって、最新式の医療機器を買い、備えることを妨害していると述べた。

週末に発刊されたキューバ機関紙「グランマ」のコラムで、フィデル・カストロは、米国とキューバは、命を助けるために、一時的であっても、違いを置いて協力しなければならないと言っている。彼は完全に正しい。

経済改革途上のキューバについての考察

キューバ独自の社会主義経済の道につながるか

河内茂幸（キューバ友好円卓会議事務局）

新外資法による外資誘致・奨励

2011 年から実施されている新しい経済モデルによる経済改革の漸進的な進捗状況の中、キューバ政府は、経済の成長を高めるという課題に対して重要な布石を打ちつつある。

経済成長のための大きな要因に位置付けている外資導入に関し、今年３月に新外資法（1995 年旧外資法の修正法）を全会一致で採択し６月 28 日に発効させて、海外からの投資を促進している。新外資法では、キューバ政府との合弁事業や外国企業とキューバ企業の共同投資に対して利益税が 30%から 15%へ（50%）軽減され、その支払いも８年間猶予される。

ロドリゴ・マルミエルカ貿易・投資大臣は、３月 28 日キューバ国営テレビの放送で「経済成長率７パーセントの目標達成のために年間 20～25 億ドルの外資を誘致する必要がある」と語った。ハバナの西方 45 キロメートルにあるマリエル港が、ブラジルの投資により近代化工事中（2014 年２月 コンテナターミナルが完成）であるが、その周辺に建設されるマリエル経済特区では、外資に対して新外資法で定められたものよりもさらに有利な税の優遇措置があり、新外資法の税以外の規定の適用も享受することができる。

ロシアと中国の投資拡大

こうした状況のなか、ロシアと中国がキューバに大きく注力している。ロシアは今年の７月初旬、プーチン大統領のキューバ訪問前に旧ソビエト時代の 350 億ドルを超える対キューバ債権の 90%を帳消しにし、残額 10%の約 35 億ドルについてはキューバが 10 年にわたって返済するものとし、ロシアはこの返済分をキューバへの投資に充てることに合意した。

プーチン大統領は７月 11 日にキューバを訪問し、資源開発、エネルギー、航空産業、防災などの分野でキューバとの 10 件の協定に調印し、さらにマリエル港の近代化工事完了後に、重要な輸送拠点を設置する可能性や、貨物ターミナルを備えた近代空港の建設についてキューバ側と話し合いを行った。

さらに、地球温暖化による影響への対処策として熱帯や亜熱帯の気候の中での食糧栽培の研究についてフィデル・カストロ前国家評議会議長と意見を交わした。

ラウル・カストロ
国家評議会議長

一方、中国の習近平国家主席は、共産主義同盟国であるキューバへの投資拡大を目的として、７月 21 日から 23 日までキューバを訪問し、29 件の協力協定に調印した。中国はキューバにとってベネズエラに次ぐ２番目の貿易パートナーであり、最大の信用供与国である。

キューバは中国とのこうした二国間経済協力関係によって、米国の経済封鎖や世界銀行などの機関による長期間の排除によって生じている経済的損失を補っている。習近平国家主席のキューバ訪問の時期に合わせて約 50 人の中国人企業家が、外資優遇措置や将来のマリエル特別自由貿易地域を見据えたビジネスチャンスを探るべくハバナを訪れている。

ロシアと中国はラテンアメリカ諸国とも関係強化

フィデル・カストロ前国家評議会議長はキューバ共産党機関紙グランマで両国首脳のキューバ訪問を「歴史的な訪問であり、中国とロシアは人類の存続を可能にするための新しい世界を先導することになった」と語った。

中国は、経済成長実現のためにさらなる投資を切望しているキューバへの投資を拡大しようとしていることに加え、ベネズエラ、ブラジル、アルゼンチンとも貿易・投資分野の協力案件を推進している。

「中国のラテンアメリカとの双方向貿易は近年急速に増大しており、昨年（2013 年）輸出入合計 2,616 億ドルに達した。中国は現在では、アルゼンチンとキューバを含む多くのラテンアメリカ諸国の第２位の貿易パートナーであり、2009 年以降はブラジルの最大の貿易パートナーである」（South China Morning Post（電子版）2014.7.23）。

一方、ロシアは、旧ソビエト時代に深かったキューバとの経済関係の復活・強化に積極的に動くことで、ウクライナ情勢を巡り対ロ制裁などによって深まっている欧米との亀裂に対処し、キューバを足がかり拠点としてブ

ラジル、アルゼンチンなどのラテンアメリカ諸国とのさらなる関係強化に乗り出したものとの見方ができる。

対話者、仲介者としてのキューバの役割

中国とロシアが従来にも増して積極的にキューバの支援に乗り出した理由の一つは、上述のようなキューバの地政学的な位置であり、もう一つは、米国の一極構造に対する多極世界の新しい秩序のなかで自主を求める多くの政治勢力に対する対話者としてのキューバの役割が増していることである。

このことは、2014 年１月のハバナでのＣＥＬＡＣ（ラテンアメリカ・カリブ諸国共同体）首脳会議の成功や、コロンビア内戦終結・和平に向けたコロンビア政府とＦＡＲＣ（コロンビア革命軍）のハバナでの交渉における仲介者としてのキューバの役割に見て取ることができる。

しかし、ラテンアメリカに対する中国とロシアの地政学的関心は同じではものではない。その関心は、中国の方がより政治的であろう。中国は政治イデオロギーでキューバと共有している部分があるからである。一方、ロシアの関心は上述したように戦略地政学的(地理的戦略)な理由に基づくものであろう。ちなみにロシアは現在では資本主義国である。

EU(欧州連合)のアプローチ

また、キューバはＥＵとも今年４月 29 日ハバナで、政治対話と協力に関する双務協定締結に向けた交渉を開始した。

これに先がけ 2014 年２月 10 日、キューバを将来の双務協定締結に向けた交渉に招聘するという決議がＥＵ外務理事会でなされていた。

キューバがその決議に基づく申し出をＥＵから受け入れての交渉開始となったものである。ＥＵは、キューバとの関係改善に向けた中心的課題として、人権の擁護・推進と基本的自由をキューバに促す模様である。

ＥＥＡＳ（European External Action Service：欧州対外行動局）は同 Web Site 2014 年５月５日付の記事で「交渉の開始はＥＵとキューバの関係強化に向けての重要なステップである。この協定を締結することによりＥＵは政治対話と関係改善のためのより強力な枠組みを提供して、変革と近代化が現在進行中のキューバに付き添う意向である。人権の擁護・促進と基本的自由が引き続き両者の関係の中心である」と述べている。

「ＥＵはキューバにとって２番目に重要な貿易パートナー（キューバの全貿易の 20%を占める）である。第２位の輸入先（20%）であり、第３位の輸出先（21%）である。また、ＥＵはキューバの最大の海外投資家でもあり、キューバを毎年訪れる観光客のうち３分の１がＥＵからの観光客である」（同上ＥＥＡＳ記事）ことから、キューバが輸出の拡大や投資誘致を促進すべくＥＵとの協定締結交渉に積極的に乗り出したと解釈できる。

米国内でも経済封鎖解除を求める動き

さらに米国についても、キューバをめぐって今年いくつかの動きがあった。５月末に全米商工会議所のトマス・ドナヒュー会頭が、そして６月末にはグーグルのエリック・シュミット会長がキューバを訪問し、「米国は経済封鎖を解き、新しい両国関係を開始すべきだ」という趣旨のコメントを行った。

他方、約 50 社にわたる大企業の重役たちのグループと米国の元政府高官らが、キューバへの制裁緩和を求める書簡を５月にオバマ大統領に提出した。

また、ヒラリー・クリントン前国防長官は、６月に出版された回想録『Hard Choices』の中で、経済封鎖はキューバが民主的改革を行わない口実に使われただけで、なんら役割を果たしていないとして、オバマ氏に経済封鎖の見直しを促しつづけたが、実現しなかったと記述している。

2014 年 10 月 11 日付インターナショナル・ニューヨーク・タイムズ（電子版）の社説でも、同紙論説委員会が「カストロ政権は長きにわたってその失政を経済封鎖のせいであるとし、キューバ国民を世界から大きく孤立させ続けてきた。オバマ氏はこの機会に長い敵意の時代を終わらせて、フィデル・カストロによる権力掌握から２年後の 1961 年に米国政府が断交して以来、非常に苦しんできたキューバ国民を支援すべきである」と記している。

さらに、キューバの経済改革について「改革のペースは緩慢であり、後退もあるが、この改革はキューバが経済封鎖脱出後の時代に向けて準備を整えつつあることを示している。キューバ政府は、“米国との新たな関係を歓迎し前提条件を設けない意向である”と語った」と記している。

そして、「ハバナとの関係を正常化することによって米国政府のラテンアメリカ諸国との関係が改善し、ワシントンとハバナの対立のゆえに阻害されてきたラテンアメリカ地域構想が促されることになろう。オバマ政権は、2015 年４月にパナマで開催される第７回米州首脳会議にキューバが出席することに警戒心を抱いており、オバマ氏は出席を約束していない。オバマ氏はぜひ出席すべ

きであり、同米州首脳会議を、歴史的な偉業を成し遂げる機会としてとらえるべきである」と結んでいる。

オバマ政権は 2009 年に、在米キューバ人のキューバ国内親族への送金をしやすくしたり、それまでよりも多くのキューバ系アメリカ人にキューバへの旅行を許可したりするなど、経済封鎖を和らげるためのいくつかの措置を実施したが、その以降は、とくに目立った措置は取っていない。

エボラ最前線に数百人の医療専門家派遣を約束

以上見てきたように、ロシア・中国との経済協力関係の強化や近い将来に見込まれるＥＵとの協力協定の締結は、経済改革のプロセスを歩んでいるキューバにとってたしかな追い風であろう。とくに、協力関係構築に向けてキューバがＥＵと交渉を開始したことはキューバの多元外交志向を示すものである。

ベネズエラ、エクアドル、ボリビア、ブラジル、アルゼンチンなどラテンアメリカ地域の主要な同盟国との政治・経済レベルでの協力関係の推進に加え、キューバがロシア・中国・ＥＵとこうした協力関係を強化・推進していることは、中南米に対する影響力が弱まりつつある米国政府に少なからぬインパクトを与えていることは十分に考えられる。

上述したように、経済封鎖解除やキューバとの新しい外交関係の構築、暫定的な経済協定の締結などを求める声が米国内で確実に増えてきている。

ちなみに、インターナショナル・ニューヨーク・タイムズ紙（電子版）は 2014 年 10 月 19 日付の社説でも、キューバがエボラの最前線に数百人の医療専門家を展開させると約束したことを称賛し、「キューバの国営紙グランマに先週末掲載されたコラムで、フィデル・カストロは“米国とキューバは一時的にせよそれぞれの違いを超えて恐ろしい禍いと戦わなければならない”と唱えている。全くその通りである」と記している。

しかし、米国内でのこうした様々な声に、オバマ政権がどこまで耳を傾けているかは未知数であり、米国からも投資を誘致したいキューバ政府の望みにもかかわらず、近い将来の経済封鎖解除の見通しは厳しいのではないだろうか。

段階的かつ非常に慎重な経済改革

ラウル政権が、個人営業や協同組合など、いわゆる小企業の育成を手始めに経済改革を段階的かつ非常に慎重に進めているのも、急進的な改革が招きかねない米国の政治介入を警戒してのことだと伝えられている。

また、改革プロセスの中で増大している経済格差や腐敗を是正しながら改革を進めていると伝えられているが、これはラウル政権が、経済改革実施に当たって政策として掲げた「官僚主義を減らす」一方で、国家としての重要な役割は引き続き果たしてゆくことの表れであろう。

今後も生じうる不公正、不平等、格差、腐敗に対して国家、換言すれば政治が、税金や補助などによる是正・補完措置、さらには学校教育のなかでの意識改革などをいかに実施しながら、生産効率性の改善、生産力の増大ひいては経済成長を達成できるかという点が、「経済の成長を高める」という経済改革の課題の重要な論点であるように思う。

ちなみに社会主義国である中国は、約 30 年前に始まった改革開放政策によって世界第二位の経済大国にまでなったが、一方で国内の不平等、格差、腐敗が増大しており深刻な問題となっている。とくに、政治エリートと官僚の腐敗は国際ニュースでもたびたび取り上げられ、習近平指導部が、その撲滅運動に取り組んでいるほどである。

クリーンな政権

それに比べるとキューバのカストロ政権（フィデル・ラウル両政権共）は、かつてのソ連・東欧で見られたような特権官僚層（ノーメンクラトゥーラ）も存在せず、かなりクリーンな状態で存続してきたところがある。

社会主義国においては、際立っている特徴とさえ言えるキューバのこのクリーンな政権は、「社会主義体制を不変として、公正な社会の中で国民がより良く生きてゆける社会システムを絶え間なく持続・維持していく」（13. 10.26. マルコス・ロドリゲス駐日キューバ大使講演於： 立教大学 より）という、キューバの国家としての方向性を実現する可能性を示しているように見える。

上述したような意味においてキューバ政権が政治と経済の健全な関係をさらに構築して発展させてゆくことができれば、現在進行中のキューバの経済改革は、かつてのソ連・東欧、また現在の中国・ベトナムとも異なるキューバ独自の社会主義経済の道につながるのではないかと思う。

そして、このような方向性こそ、「新しい経済モデルの中で社会主義をどう理論付けるか」（同上）という課題に対する、ひとつの答えになるのではないかとさえ考えている。

いずれにしても経済改革の行方を注視し続けたい。

Obama, Give me five!

５人のキューバ人へのアメリカでの連帯行動報告会

星野弥生（キューバ友好円卓会議事務局／通訳・翻訳家）

首都ワシントンで５日間行われた行動

９月 19 日、キューバ大使館で、アメリカに捕らわれている５人のキューバ人（キューバン・ファイブ）に連帯して６月にアメリカで行われた行動について、ロドリゲス大使とピースボートのスタッフであり私たちの同志でもある松村真澄さん（写真）が話す会がありました。

円卓会議からは二瓶さんと星野が参加。「講演会ではなく､親しい友人たちとの対話の会」という位置づけで、アフターにはキューバ料理とモヒートなどを楽しむ時間も用意されていました。

大使は「６月４日から 11 日の連帯週間に首都ワシントンで５日間にわたって行われた行動は質的にも量的にもこれまでを凌ぐものだった。30 カ国から 1000 人の若者が参加し、当のアメリカで行動を起こしたことの意味は大きい。２日間ホワイトハウス、法務省に 5000 人がデモをし、５人に大義があることを訴えるロビイングを行った。ワシントンだけでなく、世界各地で 400 もの集会が催され、新聞には 104 の記事が乗り、44 カ国でアメリカの大使館への抗議行動がなされた」と報告。「人道的な道理があるという認識が深まった」と評価しました。

松村さんはたくさんの写真により、４日～８日のワシントンでの行動に参加した経験を語ってくれました。世界一周の船旅を企画・実行しているＮＧＯのピースボートではこれまで 15 回キューバを訪問しています。総勢 10000 人が訪れたことになります。

「強いイメージではない「Obama,give me five!」（オバマ、5 人を返せ！）というスローガンを掲げた会議とデモに参加しました。30 カ国からの知識人、弁護士、アクティビストなどが集いましたが、基地問題、人権問題と、さまざまな分野の活動家が来ていました。

プエルトリコで独立を訴え､25 年間アメリカで獄中生活を送ったという活動家のラファエル・カンセル・ミランダ氏は『どんな国民でも自分たちの家族を守る責任・権利がある。キューバの５人のために私が闘っているのは、これが世界の中で認められるべき普遍的な闘いだからだ』と述べました。

フランスのイグナシオ・ラモネは「フィデルとの 100 時間」を著した「ルモンド」紙の編集長です。『1944 年６月６日はノルマンディー上陸作戦の行われた日で、ちょうど今日が 70 周年の日。オバマは『ナチスを英米が武力で押さえつけた。たくさんの人が殺されたことを名誉に思う』と述べたが、キューバを攻撃していることを考えるとこれは矛盾だ』と語っていました。

６月７日はカナダの連帯委員会が楽しそうにやっている自転車デモに参加しました。大学生、観光客に若い人たちがビラを渡して５人のことを伝え、600 人が法務省までデモをしました。」

弱い国にとってキューバは希望

真澄さんは、さらにキューバとの関わりの中から感じてきたことを話してくれました。

「日本でキューバのことはなかなか伝えにくい。『連帯』ということばも古いです。想像力を使って人々が知る機会を作らなければ、と思います。ＵＳＡＩＤ（アメリカ合衆国国際開発庁、United States Agency for International Development,）が、４月にキューバの弱体化を図ってＳＮＳを立ち上げたと報じられましたが、アメリカの若者たちがこのＳＮＳを使ってキューバの悪いイメージを植え付けています。ならばこちらもインターネットを駆使してつながることを考えたいです」

「パレスチナの若者に会った時、一番行きたい国はキューバだと言っていました。『弱い国にとってキューバは希望なんだ』と。キューバの現実をやっぱり伝えていかなければ。アメリカとキューバの子どもたちが仲良くしてほしい、とキューバの人たちは思っているのですから」

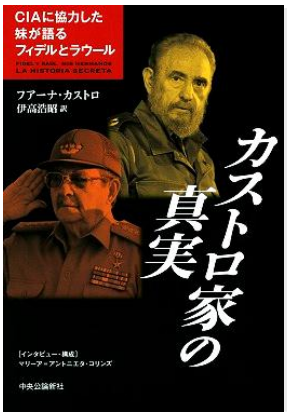
オバマ政権のほころびは、キューバに対する姿勢にも見られますね。世界のいろんなところから、「キューバ」を発信していくことの大切さを感じます。そして私たちの会がそうやって少しでも「キューバ」を伝えることに寄与できるよう願っています。

読書感想

『カストロ家の真実』

ＣＩＡに協力した妹が語るフィデルとラウール

安田 清（医師）



ファーナ・カストロ 著
伊高浩昭 訳
中央公論新社 ２０１２年
本体３３００円（税別）

キューバを愛する気持は同じでも「目的地」が真逆になった兄妹

ゲバラへのあこがれから始まり、キューバ革命、米国の経済封鎖を乗り切ってきたカストロのすごさ、現在のキューバの魅力や医療制度の素晴らしさ、これらを本から学んだ。

その中の一冊『花と革命』（竹内憲治 著　1977 年／学苑社発行／絶版）　は、革命の時代をキューバで生きた日本人の手記だ。この中にミス・ロシータという女性が出てくる。貧しい人を助けフィデルとも知り合いで革命を支援してきた女性が、革命後、裕福な階級ということで財産を没収され国を追われる話だ。

不思議なことではないのかもしれないが、キューバ関係の本は革命側から書かれた本が多いので新鮮だった。一般市民の視点、反革命側の視点も読まなければキューバ革命を本当には理解できないと感じた。しかし一般市民が革命前後について書いた本は非常に少ない。

革命後亡命したり反革命として戦ったりした人には、バチスタ政権に近い人、軍人、財産や土地を没収された人(革命支持の有無に関わらず)、革命を戦った側なのに革命後共産主義化に反対した人、など様々な人がいたようだ。彼らの書いた本はたくさんあるようだが、政治的な意図のある本も多いようで、しかも日本語に訳されている本は少ない。

フィデル、ラウルの妹であるファーナ・カストロの手記「カストロ家の真実」はＣＩＡに協力しフロリダから反キューバ、反共産主義のメッセージを発信し続け、カストロ家と絶縁し、フロリダの亡命キューバ人からも攻撃され、最後はＣＩＡからも裏切られた女性の一生をかけたメッセージである。

カストロ姓ゆえに身の危険を感じながらも革命を応援し、革命成功を共に喜びながら、共産化する政策や反革命者の処刑に抵抗し、“カストロ“の名前を最大限に利用しながら、処刑される人間数百名を助け亡命させていった。当時 20 代後半であるが、この姿勢を一生貫く。

ファーナにいくつかの疑問を感じた。この本には革命前の市民の悲惨さというフィデルやチェの革命の動機につながるものが全く書かれていない。また米国の経済封鎖をいかに生きぬくかという視点もまったくない。ファーナの基盤であるカストロ家は豊かな地主で、母も兄姉もファーナも革命で財産を失っている。知人や友人も、財産を没収され、亡命したり反革命の戦いをしたりしている階級であった。

ファーナは民主主義的革命を期待して支持してきた革命に裏切られたという思いで、フィデルを、政府を、共産主義を攻撃していく。しかし 31 歳で亡命し 45 年経って書かれたこの本は、父母、兄弟姉妹の写真をたくさん載せているし、一人一人の記述も好意的である。

キューバには責任を感じ、家族へは愛と誇りを求める気持ちを強く感じる。一人一人の家族についての詳細な記録は家族でなければ書けないもので、特にラウルについての記載は、他の本ではほとんど見られないので貴重だと思われる。

ファーナは、ラウルもチェも共産主義者だが、フィデルは違うといっている。革命が成功すると直ちに共産主義に舵をきったことを、国民に対する裏切りだと断定している。この点について私は、キューバ革命は反独裁、反帝国主義のホセ・マルティの思想を軸にした革命であり、アメリカの経済封鎖を生きぬくためにソ連と結びついていったと勝手に解釈してきた。ファーナの記載を読み、この点は分らなくなった。

フィデルもファーナも、目的に向かって一直線に努力し、誰も恐れず、私欲が全くなく、周囲の人を巻き込んでいく行動力があるという点では同じ種類の人間だろう。原点が異なり、したがって目的地が真逆になったが、キューバを愛する気持ちも“祖国か死か”という姿勢も同じなのだろう。

ドキュメンタリー映画『Cuba Cuba Cuba』芸術っていったい誰のもの？

11 月 23 日　待望のＤＶＤ発売！（日本語字幕付き）定価 3000 円（税別）

富田君子（『Cuba Cuba Cuba』コーディネーター）

12月6日 キューバ友好フォーラムの会場で販売します♪

人間愛に満ちた平和を願う人びと

キューバ、陽気なカリブ海の国、貧しいけれど人生を楽しむことを知る人びとが住む社会主義の国。日本人が抱くキューバのイメージはそのようなものだと思います。

そこには音楽、美術、映画、スポーツなどが人々の中に根を張り、文化をごく自然に普通に享受する人びとがいます。1959 年革命で教育･医療の無料化を実現したキューバ。

芸術っていったい誰のもの？　監督のその問いかけに対する様々な答えを『Cuba Cuba Cuba』を通して得ることができるでしょう。

私は、2010 年、撮影のため西川和子監督、カメラマンとともにキューバを訪れ、現地チームと行動を共にし、有名無名な人々へのインタビューをじかに見る機会を得ました。この作品は、彼らの飾らない自然な受け答えから、その人物像、家族関係、国への思い、未来への夢などを浮かび上がらせています。人間愛に満ちた平和を願う人びとがそこにはいます。

なお同作品の出演者の一人でもあり、本年６月『Cuba Cuba Cuba』プレミエルに来日し、キューバの特別支援教育や医療について日本各地で講演をしたアレイダ・ゲバラさんも日本語版発売に当たり、「キューバを知らない人、カリブ海のこの美しい島に住むエネルギーに満ち、優しく、陽気なキューバの人びとを知らない人は、このドキュメンタリーを通して、親しみを感じ始めるでしょう」とメッセージを寄せてくれました。

この作品を通して優しく・暖かくそして困難を笑いに変えてしまう強いキューバの人々との色々な出会いがありますよう心から願っています。

ドキュメンタリー

『Cuba Cuba Cuba　芸術っていったい誰のもの？』

スペイン語（日本語字幕付）

■制作･監督･作案■

西川和子／アソシエイツ･デイレクター:フリオ･アカンダ

■出演者■

シルビオ･ロドリゲス

ラテンアメリカを代表するシンガーソングライター。映画で流れる「オハラ」は世界中で愛される大ヒット曲。

アナ･フィデリア･キロット

陸上競技選手。1992 年バルセロナ、1996 年アトランタの両オリンピックでメダルを獲得した。

サイダ･デル･リオ

キューバで最も評価が高い女流画家。絵画、彫刻、陶器、壁画のほか、イラストレーターとしても活躍。

チューチョ･バルデス

キューバの偉大なジャズ･ピアニスト。ラテン･ジャズ･バンド「イラケレ」などでグラミー賞を 5 回受賞。

セネル･パス

ベルリン国際映画祭･銀熊賞「苺とチョコレート」の原作者･脚本家。「バスを待ちながら」の脚本も手掛けた。

ネルソン･ドミンゲス

キューバを代表する国際的画家。独創性あふれる作品を生み出し、世界的に人気が高い。

■お求め･問合せ■

Ahora　corporation　アオラ･コーポレーション

Tel　03-5336-6957　　Fax　03-3247-1263

http://www.ahora-tyo.com/　　E-mail　info@ahora-tyo.com

上記ウェブ･ショップ以外に、全国のＣＤショップ、各種ショッピング･サイトでご購入いただけます。

富田君子　E-mail kimito@lilac.plala.or.jp　Fax 045-563-7482

BOOK『キューバ医療の現場を見る』

キューバ友好円卓会議編／同時代社　1600 円＋税

本書は、2008 年3月の円卓会議主催のキューバ医療ツアーの現地報告を中心に、医療制度や医療支援の現状がまとめられている。執筆者は、総勢35人からなる訪問団の中の8人の医療関係者によるものである。

キューバの医療･保健は地域の住民が利用できる身近なコミュニテイから地区へと繋がる合理的なシステムが構築されているばかりか、それを支える人的な資源にも恵まれており、優れて機能的と思われる。精神医療においても、精神障害者を入院病棟ではなく、地域の保健センターを多数作って、出来るだけ入院をさせない方針で、地域ケアに力を入れている。

少しでも多くの方に、キューバの医療、教育に目を向けてもらいたい。

キューバに初めて上陸した日本人の 400 周年記念

スペシャルショー　素晴らしきキューバ

（サンティアゴからハバナへ）
音楽、ダンス、その他

11 月 24 日　14 時～18 時（開場 13 時 30 分）

会場　渋谷区文化総合センター大和田　さくらホール
東京都渋谷区桜丘 23－21／渋谷駅西口から徒歩５分
渋谷駅ハチ公口から直行シャトルバス（13：17／13：37）

入場料　3500 円

チケット　全国のローソン店頭の「Loppi」または
キューバ大使館（領事部）で購入できます。
ローソンチケット　Ｌコード：７７７２４

主催・問合せ　駐日キューバ共和国大使館
TEL 03-5570-3189（領事部）
e-mail　consulado@ecujapon.jp

速報！　キューバ友好円卓会議主催

第3回　キューバツアー　決定！

医療施設･学校及び革命の足跡をたどり
美しいキューバの海岸での休日

2015 年４月 23 日（木）～30 日（木）８日間

ハバナ・サンタクララ・アンコン海岸（予定・変更あり）

費用　35 万円　　**定員**　15 名

★１週間ほどの延泊企画を予定しています。
金額は１日約 15000 円の追加

申込み締め切り　12 月 20 日

※定員になり次第、締め切らせていただきます。

詳細は後日改めてご案内します。

問合せ・申込み　キューバ友好円卓会議事務局
〒157-0073　東京都世田谷区砧 8-15-14-101
e-mail：cuba.entaku.0803@gmail.com
FAX　03 - 3415 - 9292

第 10 回　メーデー国際ブリガーダ

2015 年４月 27 日～５月 10 日

親愛なる友人の皆さん

キューバ諸国民友好協会(ICAP)と旅行代理店 Amistur Cuba S.Aは第 10 回メーデー国際ブリガーダのご案内をお送りします。

参加者はボランティアワークだけでなく、歴史的・社会的場所を訪問したり、私たちの現状をテーマにした会議に出席したり、様々なキューバの団体代表者や、他の参加者、キューバの労働者たちと交流を行ったり、ラテンアメリカで初めて帝国主義米国が 72 時間以内に撤退を余儀なくされたプラヤ・ヒロン訪問などが行われます。
ブリガーダは 2015 年４月 27 日から５月 10 日まで、ハバナ、アルテミサ、そしてプラヤ・ヒロンのあるマタンサスで開催されます。下記にプログラム内容の詳細が記されています。
社会主義計画の経済モデル刷新として行われている様々な変化の中にある今日のキューバの現実について幅広い知識が得られるでしょう。

参加費は 320CUC で、６人のシェアルームでの宿泊（キャンプ場の場合）と、マタンサス州プラヤ・ヒロンにある 2 つ星ホテルでのツインまたはトリプルルーム（空き状況による）、１日３回の食事、プログラム内の移動費が含まれています。

フリオ・アントニオ・メヤ国際キャンプ場の定員 240 名を超えた後のお申し込みの場合、参加費は 525CUC となります。こちらの宿泊はキャンプ場の近くにある２つ星ホテル、ラスヤグルマスでのダブルルーム、そしてプラヤ・ヒロンでは２つ星ホテルとなります。

全 14 泊のうち、11 泊はハバナ市から 45 キロのカイミート市にあるフリオ・アントニオ・メヤ国際キャンプ場（CIJAM）に滞在し、3 泊はマタンサス州プラヤ・ヒロンの観光施設に滞在します。

ブリガーダ参加者はプログラム全ての活動へ参加するほか、キャンプ場のルール、適切な振る舞い、規律を守り、責任ある態度、集団生活への順応が求められます。
申込の締め切りは 2015 年３月 30 日です。締め切りまでに参加者の情報とキューバへの出入国日ならびに航空機便名を連絡してください。
皆さんのご参加をお待ちしています。
友情をこめて。

キューバ諸国民友好協会（ICAP）

担当：ICAPヨーロッパ局
e-mail deuropa@icap.cu　euroeste@icap.cu
diretor.europa@icap.cu
旅行会社 Amistur Cuba S.A.
e-mail: amistur@amistur.cu　coventas2@amistur.cu